

「片一方はどうした」

「……落っことしてきちゃった」

笑顔のまま恥ずかしげに言う凜は、行儀の悪さも嬉しさのあまり忘れているらしく、だから咎める気も起こらない。言峰がソファを指し示すと凜は嬉々として腰をかけ、片方だけのスリッパがせわしなげに揺れる。何かを言いたくてたまらない顔に、何かを訊いてはしくてたまらない目をしている。

「お転婆なお嬢さんだ」

「オテンバって、なあに」

「元気があっていいことだよ」

多少誇張はあれど、正直な感想だった。今日の前にいる凜は、空虚を隠すためでも寂しさをまぎらわすためでもない、心の底からの嬉しさが顔から滲み出ている。妹がいなくなっただけでどこかしらにあつた翳りも形を潜めているようだ。

「綺礼も座ってください」

言峰は本を棚に戻し、凜の言葉に従って真向かいの席に腰を下ろした。真剣なふたつの目が、こちらを呑みこまなばかりに向けられている。

「聞いて」

重大な秘密を暴露するかのように胸を張った凜を、言峰は手をあげて遮った。

「お父上が魔術を指導してくれることになったんだろう」

凜の見開いた目がだんだんと普通の大きさに戻っていく。つられて興奮が引き、瞳の輝きが収まっていく様子まで言峰にはまざまざと見てとれた。相手に喋らせればいいものを、意地の悪い態度をとってしまうのはなぜなのか、自分でもわからない。

「なんだ、知ってたの」

「君の慌てぶりを見れば判るよ。まずは落ち着きなさい。

菓子でも食べるか」

無意識にからかうような顔を見せていたかもしれない。

凜は唇をすぼめ、首を横に振った。

「食べたいけど、太るから我慢します」

「そんなことを気にするような歳でもないだろう」

「綺礼にはわからなくていいです。女心をわかってくれな人なんて、嫌いです」

「女性はずっと上品な断り方をするものだよ。それに階段でスリッパを落として、挙句の果てに放り出したりしない